

「若菜」卷（上・下）における明石の君

— その外面と内面の乖離 —

武原弘

「若菜」卷における明石の君は、入内していた娘明石の女御の男御子出産という慶事に与り（若菜上、(4)―(1)〇二）、やがては若宮立坊の栄耀を拜跪する喜びのときにも会い（若菜下、(4)―(1)五九）、母尼君とともに、世の「幸ひ人」（同、一六八）と評判された。多年にわたる「卑下と忍従という意識的な自己否定」（今井源衛氏^{注1}）を生きてきた明石の君にとつて、たしかに「わが宿世はいとたけぞ」（今、恨めしきふしもなし）（若菜上、(4)―(1)二四―(1)二五）と自得される現在の僥倖である。彼女はなおも卑下謙讓の態度を保持し、榮華を極める六条院において自足の境涯に至りつつあるかのごとくである。

ところで、「若菜」卷におけるこのような明石の君の人間像は、かつて「口惜しき身のほど」（薄雲、(2)―(1)四―(1)三）認識から、源氏との愛情関係を深い懊悩痛苦のうちにつなぎ来たった物語第一部での彼女のそれとは、甚しい隔たりを不すものであるのが注意される。阿部秋生氏によれば、「若菜」卷に入ってから明石の君は「変貌」

「若菜」卷（上・下）における明石の君—その外面と内面の乖離—

したのであつて、「よくいへば、穏やかになつてゐる。わるくいへば、須磨・明石以来のあの明確な性格を喪失して、あてもななくてもいい背骨を失つた人物」であつて、そのような明石の君造型そのものに作者の「批判」「救ひがたい不幸な姿を見る眼」が向けられているとされる。特に「若菜」卷に限定しての論考ではないが、はやく今井源衛氏によつても、「薄雲」卷以降の明石の君は「心中の葛藤」を失い、「上層者に屈服し同化する」「知的な自己防衛の態勢」を貫き、「それ故、彼女の人間像には、青白い幽光の揺曳はあつても、赫奕たる生命の燃焼感には乏しい」と結論されてもいた。

ひつきょう、明石の君物語後半部に析出される彼女の人間像について、両氏の見解は一致しているものと学べよう。さらにまた、「若菜上」卷の物語文脈にいつそう密接してなされた秋山虔氏の連続する明石の君論が想起される。

この卷において、明石の君の人間像は「明確に鑄変えられている」ことを肯んずる氏にとつて、追求すべきは、彼女を「そうするほかなく変質させる六条院世界」およびその「物語全体の『描き方・語り方』」のありようであつた。「わが自足へと落着いていく」ここで

の明石の君造型が、そのまま「六条院の榮耀を虚飾として撥ね上げ、内実にかかえこんだ深刻な矛盾を突き出していく」そのような物語の「世界構造」を、氏は精確緻密な本文分析によって解明された。

先学のこうした高論のほかにも、多くの卓説がなされている。

「若菜」巻における明石の君について、もはや論考は究め尽くされているとも思われるのだが、ここで「幸ひ人」と呼ばれてはえ榮えつつ、しかも確実にその存在の影を薄め変貌していく彼女の内面世界とはいかなるものであったか、彼女の内面の意識において、源氏との愛情世界は、なぜ、どのように変質、変容するものであったのかという点については、なお追考の余地があると思われるのである。

「若菜」上下巻において、明石の君の内面心情を叙す描写文は、むしろ少い。故にこそこのような課題設定が理由を待つと考えると、小論は狭義の心情表現のみならず、彼女の行動描写そのほかの物語叙述にも注意をほらいつつ、この巻における明石の君世界の内面深層を読み果たそうと試みるものである。

二

女三宮の六条院降嫁のことが当面の落着をみた後、物語は出産をま近にした明石の女御を中心とした場面描写へと進展する。いまだ十三歳の女御の出産は心配で、「いかにおはせんとかねて思し騒ぐ」(若菜上、(4)―九五)源氏は、大規模な加持祈禱を行う。この場面の明石の君については、

母君、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなめれば、いみじき心を尽くしたまふ。(同、(4)―九六)

との描写が施されている。女御の生母であることをあらためて強調する「母君」の叙述が注意される。母として、娘の出産の無事を祈る気持、生まれ来る御子が男子か女子かによって証せられる彼女の宿運の強さへの切なる思いを表現したものである。前後の文脈において「藤裏葉」における女御人内の場面も含めて、地の文で明石の君を「母君」とする叙述が続くことに、留意したい(4)―九六、九七)。

やがて、女御は男御子を出産。源氏は「御心落ちゐたまひ」、「人の親めく」(同、(4)―一〇二)紫の上が赤子を抱く。ここでの明石の君は、「まことの祖母君」と呼ばれ、御湯殿に奉仕する。この呼称が、御子を中心視点に置きつつする女御の生母明石の君指示の表現であることは、すでに自明としてよい。さらにまた、明石の君の母は、ここで「大尼君」(同、(4)―九六)と叙せられるが、これは直接的な血族関係語ではないとしても、女御からみでの血族年長者を表意する呼称であると解して、不当とはいえない。ひつきょうするに、地の文におけるこうした血族関係呼称の重畳によって、明石の君をめぐる一簇の繁榮の物語が、いっそう確かで豊かな具象世界を獲得、増進させていくことになるのである。

しかしながら、ほぼ同じ文脈のなかで、明石の君にかかるこうした内親血族の関係が、六条院の体制、秩序のもと、きびしい抑制を負い受けつつ営まれなくてはならなかった場面状況が併叙されていて、注意が必要である。この問題については、前節で触れたように、すでに阿部氏、秋山氏ほかによる詳しい考論があり、ついて学ぶことができる。高説に導かれながら、いま、当面の物語文脈、場面で

の明石の君像について、その要点を再確認しておきたい。たとえば、さきにも触れた御子誕生の場面、明石の君は典侍とともに御湯殿に仕え、迎湯の役を勤める。阿部氏が説かれるごとく、「女御の実母としてではなく、女御に仕へる女房、召人としてこの役に奉仕していることになりかねない」その姿は、いま「人の親めきて」（前引）若宮を抱いて立つ紫の上それと、あまりに対照的である。が、その折の明石の君の態度は、典侍の目に、

すこしかたほならばいとほしからましを、あさましく気高く、
げにかかる契り、ことにものしたまひける人かな（若菜上、(4)
—102—)

とみられている。秋山虔氏は、この本文叙述に「迎湯役に身をおとそうが、そのことによつて少しもさしひかれることなき果報に生きる勝者」明石の君の姿を読みとられる。いま、阿氏説に併せ学んで、将来は後の母となるであろうわが身の至福を思いつつ、かつは謙遜な女房役としてふるまう明石の君の、乖離した内面と外面を了解することが許されよう。このことはもちろん、彼女の人格の分裂のさまを意味するのではない。明石の君について、内界外界相渉つての意思的謙抑を原理とする確かな統一、人格の再措定の謂なのである。このような明石の君の人間造型が、続く本文叙述

御方の御心おきての、らうらうじく気高くおほどかなるもの、
さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬなどほめぬ人
なし。（若菜上、(4) —103—）
に直結していくのは、物語に読みやすい文脈とみられよう。

文脈をほぼ同じくして、女御との十年ぶりの対面を喜ぶ尼君が、
「若菜」卷（上・下）における明石の君—その外面と内面の乖離—

そば近くに対座して昔語りをし、明石の君に強くたしなめられる場面が描かれる。涙ながらにする尼君の間わず語りに、女御は、あらためて身分低い自分たち一家の過去を思い知り、現在のわが身を深く内省して共に感泣に臥すのであるが、この場の尼君を非難する明石の君の口調は、いとも激しい。

あな見苦しや。短き御几帳ひき寄せてこそはさぶらひたまはめ。
（中略）医師などやうのさまして。いとさかり過ぎたまへりや。
（若菜上、(4) —九八—）

秋山氏が説かれる理「明石君が、女御に対する尼君の接近を忌むのは、女御が后へるの道をひたすら歩まねばならぬ高貴の女御であるべきだからである」そのまに、明石の君自身、娘女御を「わが子ともおぼえたまはずかたじけなきに」（同、(4) —九九—）との態度をもって敬し遠ざけなくてはならなかつた。そのように近親血族の情愛の発露さえきびしく抑止する六条院の体制・秩序にあって、ここでの明石の君は、常ならぬ焦慮の体を示すかのごとくである。

明石家族三人におけるこうした非人間的ともいふべき私情抑制の状況は、続く物語場面において、つかの間の弛緩、解放を与えられはする。加持を終えて僧侶たちが退出した後、六条院の一隅に、家族三人水入らずの、ひそやかなひと時が流れる。一家の苦勞多かつた過去を思い、なつかしい故郷明石の浦を恋うて、三人は涙ながらに唱和する。三者三様の詠歌は、それぞれでありつつも肉親家族の深い愛情一つで結び合わされて、抒情連綿たる風趣をなす。いまだけは、明石の君も「え忍びたまはで、うち泣きたま」（同、(4) —一〇〇—）うのであつた。幸福なひと時であつたらう。

思うに、ひたすらなる謙抑自卑によつて招来される明石の君の外面のいや栄えは、内面における等価の「幸ひ」として彼女に内在化されたのかどうか、はなはだ疑問とすべきではなからうか。物語本文をさらに辿つて、この問題を検証することにする。

三

若宮誕生のことを伝え聞いた明石の入道から、明石の君に長文の消息が送られて来る場面を読み進もう。手紙は、慶祝の詞に併せ、入道のいよいよの入山決行を知らせたものであるが、中に、かつて明石の君誕生のとき彼が見た瑞夢について詳記があり、感銘深い。

みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす。みづからは、山の下の際に隠れて、その光にあたらず……(下略)(若菜上、(4)―(10)―)
すなわち、明石の君の娘(女御)が中宮になり、孫(若宮)が東宮になることの夢告げであった。以来多年、入道はこれを信じ頼み、住吉明神にも願を立てて祈り続けてきて、今日の慶びに会えたと言っている。他にもいろいろと書き添え、別に願文を入れた文箱も届けられた。

明石の君は、「この夢語を、かつは行く先頼もしく」(同、(4)―(10)―) 思うものの、死を覚悟しての入道の入山に、ついに再会することのない父との更なる生別を深く悲しみ、「涙をえせきとめず」(同) 哀泣する。対座する尼君も思ひは同じで、娘明石の君のめどたい宿縁につながる喜びはそれとして、行き離れて久しい夫との生きながらの永訣は、あまりにも悲しい。一族の栄華を支えて犠牲と

なつた入道のことを思つて、二人は夜を通して泣き明かした。が、六条院の暁は非情というべく、悲喜交々の二人の私情を、いちちはやく遮断する。源氏の目を氣遣う明石の君は、しきりに孫若宮に会いたがる尼君を置き去りにして、宮と同室の女御のもとへ急ぎ帰り、いつもどおり「うちとけぬさましたまひて、わりなくものづつみしたるさま」(同、(4)―(16)―) で近侍するのである。

明石の君は、入道の手紙を女御にも見せる。あらためて知る一家の過去と宿縁に感じ、女御もまた、涙を止めることはできない。

くり返して反問することになるが、宿運ますます栄える明石の君は、いま真実の幸福を己が身に実感しているのであらうか。彼女たちの涙が、悲喜交々のそれとして二筋に流されるのは諒としても、それがいつでも「六条院の隠れの方」^(注)「あい忍ぶ対座」(秋山氏)の場でのみ許される問題状況は、彼女においてどう認識されていたのであろうか。

こうした一連の場面を追いつつ、小論がいま最も注目するのは、次の叙述である。

人にすぐれん行く先のこともおぼえずや。数ならぬ身には、何ごともけざやかにかひあるべきにもあらぬものから、あはれなるありさまに、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ中略)世の中も定めなきに、やがて消えたまひなばかひなくてなん。(若菜上(4)―(12)―)

入道の手紙を中において、尼君とともに一夜を泣き明かした折の、明石の君の会話の一節である。

これまでの自らの人生を深く省察、その過去と現在のみなならず、

遠く将来にまで思いをいたしての彼女自身の述懐として味読される。右において、「人にすぐれん行く先」とは、『全集』の頭注のとおり、「入道の夢が正夢であつて、若宮が即位し、明石の女御が国母になること」を意味する。その輝かしかるべ将来の栄えを、彼女は「おほえずや」(どうでもよいことなのです)と、一蹴している。「数ならぬ身」低い「身のほど」に生い立つた彼女は、いつの世にも女御の母、若宮の祖母と晴れて認められることはないのだから、との嘆息が後に続いている。「あはれなる……口惜しけれ」の部分については、諸注とも明石の君と父入道との悲しい生き別れ、その生死もわからずじまいとなる哀別を歎じた叙述と解する。他方、玉上琢弥氏は明石の君自身のことを述べたのもと解釈され、「情ない日陰者の状態(注10)で終わつてしまふ事だけが残念です」との訳を施される。

己れの生をしみじみ顧りみ思う述懐の文脈をおさえるなら、玉上氏説が正当と認められよう。さらに、「世の中も定めなきに」との叙述によつて、明石の君の人生観の根底に、世の無常を知る仏教的認識も確かであつたことが了解される。彼女はいま、愛する父入道との最期の別れに臨み、肉親血族の愛情をさえ犠牲にし、卑下と忍従に生きることはじめて得られた現在の身の上の栄華がいかにはかなく、空しいものであるか、自身の内面に抱懷される深い絶望、悲観の思いを表白しているのである。

現在の明石の君の内面心意を物語る、いまひとつの叙述にも留意したい。入道の遺言と願文を女御に見せた折の会話中で、「世の中定めがたければ」(若菜上、(4)―一四)と再び人生の無常を嘆じ

たのち、彼女は次のように述懐する。

かばかり、と見たてまつりおきつれば、みづからも世を背きはべりなんと思ふたまへなりゆけば、よろづ心のどかにもおほえはべらず。(若菜上、(4)―一五)

右の「かばかり」を、女御が若宮の母となつたいまの意とする解もあるが、『大系』頭注、女御が将来后となるはず、の意に解する注釈も行われる(『全書』『集成』頭注、玉上氏『評釈』など)。この叙述は、明らかに前条本文「今はかばかりと御位を極めたまはん世に」(同、(4)―九九)の叙述を承けてなされたものであるから、こゝも後者の解が正しい。すなわち、明石の君は、女御にもわが身にも実現しつつある極上の栄華に背を向け、父入道と同じように、出家し来世を祈る生活を念願しているのである。

「思うたまへなりゆけば」に留意して、それほどさし迫つた強い決意ではないにしても、いまの明石の君に抱懷される出家の願望は、いささか唐突とも読まれる。あるいは、かつての源氏がそうであつたように、この後紫の上もまたそうであるごとくに、いままさに栄華の極みにいたらんとする人物たちが唐突に世の無常を觀じ、出家の志を内界に深くする思惟型式(源氏の場合は「給合」卷、(2)三八二に、紫の上の場合は「若菜下」卷、(4)―一五九ほかに叙せられてい)が、こゝでの明石の君にもくり返されているのであろうか。それとも、当面の物語場面により密着して読み、父入道の入山遁世を知らされた彼女のにわかな悲観、厭世の思いを了解すべきなのであろうか。いずれにもせよ、明石の君がいま、六条院における己が身のいやましの栄華を虚無と觀じ、厭離せんとする宗教的思念を抱

懐いていることは注意されなくてはならないのである。彼女における外面と内面の乖離は、いっそう深刻といわざるをえない。

四

明石の君は、たまたま訪れて来た源氏にも入道の手紙を見せる。

はじめは冗談言の応酬で軽快に進んでいた会話であったが、入道の遺言を中にして、いつか二人は涙ながらの独語をとり交わし、哀情を分かち合うことになる。源氏は、あらためて入道の信仰深い人柄を思ふのであるが、この場面において、入道の手紙を読み進める源氏の様子について、明石の君が特別の注視を向けるところが描かれていて、小論では看過できない。

この夢語も思しあはすることもや、(若菜上、(4)一一九)
注目していると、はたして源氏は、

この夢のわりに目とどめ給ふ。(同、(4)一二〇)
のであった。思い合わせるところがあるという源氏の言葉、

この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかと、目の前に見えぬあなたのごとは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、(同、(4)一一二)

とは、早く明石の女御の誕生の際に確信された宿曜師の予言

御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし。(濤標、(2)一二七五)

と、まさしく重なるものである。源氏はいま、宿曜師の勘申そのままに生き来た自らの運命が、他方で住吉の神意に領導されて波瀾の生をそれぞれに辿り来た明石一族の宿運と一つに重ね合わせられて

いたことを知って、あらためて深い感慨を覚える。

留意しておきたいのは、源氏が、すではやく宿曜師の勘申を受け、女御の将来について予見するところがあつた事実、明石の君がはじめて気がつく物語の描かれ方である。父入道の祈願による住吉明神の導きを知つたのはそれとして、これまでの源氏との関係交渉一かつて、強引な形で京を迎えられ(松風)、次には生木を引き裂くように愛児(女御)を引き取られ(薄雲)、以後はひたすらなる卑下と忍従の態度を持して源氏に従ひ、六条院にあって現在も内親血族の情愛をさえ抑制して「幸ひ人」の境遇を生きる彼女の人生一が、源氏の愛によつて導かれ来ているのではなく、むしろ予言の実現過程として彼によつてとりなされてきたにほかならないことを、明石の君はいま明瞭に確認したのではなからうか。源氏が続けて語るのが、紫の上称揚の談であつてみれば、明石の君のこの心の失望、落胆はいっそう深い。

さりや、よくこそ卑下しにけれなど思ひつづけたまふ。(若菜上、(4)一一二四)

との内心語が、そのことを端的に物語っている。源氏の愛は、紫の上一人にのみ注がれており、明石の君に対する処遇は、女御の立后を実現するための一手段、階梯に過ぎなかつたことを知り、彼女はさらに思念する。

わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける。やむごとなきだに思すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし。(若菜上、(4)一一二四―一二五)

右の叙述について、阿部秋生氏は、明石の君の「奇怪な歓声」と読まれ、それに対する伊藤博氏の批判もなされている。が、表層において「歓喜の声」を読みつつ、阿部氏ご自身が続けて説き下されるように、それ以上の説明を施さない物語作者の眼は、「女の―殊に受領・諸大夫の子女の救ひがたい不幸を見てゐた」とする、そのような叙述の深層を読みぬくべきであろう。小論の問題意識において、いまとりわけ留意したい叙述の細部がある。「すべて、今は、恨めしきふしもなし」は、明石の君に対する源氏の処遇のし方も含め、一応は六条院における彼女の自足の境涯全般を意味するのである。が、「恨めし」の語は、限定はされないものの、多く男女間の愛情関係にかかわる不満、不如意の心情を表わすのに用いられる。(例えば「おのがじしうらめしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮など」帚木、(1)―131、「久しくなりぬる絶え間を恨めしく思すにや」若菜下、(4)―122など)。ここでの「恨めし」も、そうしたニュアンスを語根に引いてなされる叙述ではないだろうか。いま明石の君が、紫の上や女三宮にばかりかかずらつて自分を顧みてくれない源氏の薄情を恨んでいる、というのではない。が、愛情によるのではない、ひとえに予言実現のために持続保持されてきたに過ぎない源氏との夫婦関係のあり方を知つて、彼女はいま深い失望、さらには諦念を覚えていて、と小論は読みたいのである。低い「身のほど」を痛覚し、にもかかわらず誇り高い一人の女性として源氏を愛し、愛されたいと願えばこそこのひたすらなる卑下忍従の果てに、明石の君がいま内面に臨む虚無の深淵。愛のない源氏との関係において、表には立てない女御の生母、若宮の祖母の身が何であるというのか。

「若菜」卷(上・下)における明石の君―その外面と内面の乖離―

しかしながら、明石の君はこうした自身の内面をけつして源氏には見せない。あくまでも冷静に、絶え籠つた父入道进行、また対座して「後の世」を思う母尼君を慰めるだけである。

その後の物語は、しばらく明石の君から離れる。女三宮に恋慕の情を寄せて魂あこがれる柏木の様子、玉鬘・鬚黒あるいは式部卿一家のその後の動静について語つたあと、

はかなくて、年月も重なりて、(若菜下、(4)―156)

一挙に四年間も物語時間の流れを叙す。このはやい四か年の経過は、通説のとおり、紫の上の身にかかる重厄の年

今年は三十七年にぞなりたまふ。(同、(4)―197)

と、それに直結する彼女の発病

夜更けて大殿籠りぬる暁方より御胸を悩みたまふ。(同、(4)―

203)

を語り急ごうがための、物語作者の一種の省筆叙法とも呼ばれるべき描写手法によつていられる。ついには紫の上の絶望と死で終結される六条院内部崩壊のドラマは、すでに急テンポに始発進行していたからである。

ところで、小論が看過しえない問題とは、当然ながら、さきの四年間の歳月が明石の君の身にどう流れていったのか、という点である。物語本文について見ると、冷泉帝の讓位、現東宮の即位にあわせて、

六条の女御の御腹の一の宮、坊にゐたまひぬ。(若菜下、(4)―157)

新東宮についての叙述がある。明石の女御については、

東宮の女御は御子たちあまた数そひたまひて、いとど御おぼえ並びなし。源氏の、うちつづき后にゐたまふべきことを、(下略)

(同、(4)―一五八)

と叙せられていて、近い立后のことを読者に思わせている。新帝には、明石の女御入内に先んずる麗景殿女御の入内があった(「梅枝」巻)ことを想起するなら、明石の女御の立后は、必ずしも自明とされていたわけではないことが知られる。さればこそ、源氏のここで的心中思惟

六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを飽かず御心の中に思す。(同、(4)―一五四)

を併叙することによって、物語の作者はここでの治世交代、あるいは明石の女御のやがての立后を合理化、必然化しようとするのである。そうした文脈を辿ってみると、さきの四年間のはやい経過は、前述した明石入道の夢告げ(源氏に示されていた宿曜師の予言の、はやくて確実な実現を語り定めるためのものであったと解することができる。さらに言えば、明石の君の急速な上昇と紫の上の突然の下降とに同時に作用する、またそれによって一途に自壞へと向かう六条院世界の内部時間の、はやい経過をも意味するものであったと了解されて正当なのである。

しかしながら、こうした榮華に至つてなお、明石の君の謙抑卑下の態度は変わらない。源氏や紫の上に随行して住吉へ願果たしに赴く折にも、傍らでうかれ喜ぶ尼君とは対照的に、

もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらば、(若菜下(4)―一

六二)

と、明石の君はあくまでも「しづめたまひける」(同) 自抑の態度を保つ。やがて住吉の社頭に立つて、源氏や尼君、紫の上や女御などが次々に唱和する中で、明石の君にはついに詠歌がない。藤井貞和氏が論ぜられるところ、明石の君における「うたの挫折」^(注1) 状況の極限と把握すべきなのであろうか。現在の身の上の榮華を神前に謝するには、その代償としての労苦と憂愁のあまりの深さが彼女の内面を圧倒し尽くしているのであろう。「万歳」をくり返す人々にぎわいをよそに、いま消えかかっている「庭燎」を見つめる明石の君の孤影が、いかにもさびしげなのである。

以降の物語展開において、春灯に映える女樂の奏者の一人として点景される場面を除いて、明石の君の姿は絶えて見られなくなる。さしかえられるように、無類の榮華の中で深刻な苦悩を抱いて死を凝視する紫の上の内面が照射され、物語は激しいテンポで、その悲劇的終末への軌跡を追い辿る。小論の視座によれば、明石の君における外面の榮華と内面の悲哀憂愁の乖離状態が、物語の進行に伴つて、紫の上におけるそれに移し変えられていくドラマの深層を見て取ることができるのであるが、この問題については、別の機会に考察を試みることにしたい。

ともあれ、明石の君もまた、この物語における女人受苦の思想の一大典型であつたことは確実なのである。

注(1) 今井源衛「明石上について」(『国語と国文学』昭24・6、

『源氏物語の研究』昭37、未来社刊所収)

注(2) 阿部秋生『源氏物語研究序説』(昭和34、東京大学出版刊所収)

注(3) 注(1)に同じ。

注(4) 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―「若菜」巻における明石物語・続―」(『源氏物語とその周辺』) 古代文学論叢第二輯 昭46、武蔵野書院刊所収)

注(5) 比較的新しい論考として、鈴木日出男「光源氏の女君たち」(『源氏物語とその影響』 古代文学論叢第六輯昭53、武蔵野書院刊所収)、高橋和夫「明石一族の物語」(『源氏物語の創作過程』平4、右文書院) など。

注(6) 注(2)に同じ。

注(7) 秋山虔「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」(『国文学』昭45・5)

注(8) 注(7)に同じ。

注(9) 注(4)に同じ。

注(10) 玉上琢弥『源氏物語評釈 第七巻』(昭41、角川書店刊)

注(11) 注(2)に同じ。

注(12) 伊藤博「明石君」(『国文学』昭43・5)によると、「それは女三宮への処遇との相対的な関連のもとに発せられた言」であるから、阿部氏のように断言はできないのではないのかとさしている。

注(13) 注(2)に同じ。

「若菜」巻(上・下)における明石の君―その外面と内面の乖離―

注(14) 藤井貞和「うたの挫折―明石の君試論―」(『源氏物語及び

以後の物語』 古代文学論叢第七輯 昭54、武蔵野書院刊所収)

なお、本文の引用には、阿部秋生 秋山虔 今井源衛各氏校注『源氏物語』(日本古典文学全集)を用いた。また、山岸徳平氏校注(日本古典文学大系)、石田穰二 清水好子各氏校注(新潮日本古典集成)、池田亀鑑氏校注(日本古典全書)の頭注を参照して、稿中にはそれぞれ「全書」「大系」「全集」「集成」などの略号を用いさせていただいたので、謝してお断わり申したい。